



(那覇)

調査地は現在の那覇港北岸に位置し、一五世紀以降琉球における貿易の拠点となった那覇湊の玄関口にあたる。周辺には近世にかけて、唐船小堀(とうせんぐむい)船着場・宮古蔵(みやこくら)倉庫などの港湾施設、親見世(おやみせ)物産センターや市場などの商業施設、また薩摩藩の在番奉行所といった行政施設などを擁する、文字通り那覇の中心地であった。

## 沖縄・那覇港周辺遺跡群 旧東村地区

- 1 所在地 沖縄県那覇市東町
- 2 調査期間 一九九六年(平8)九月
- 3 発掘機関 那覇市教育委員会
- 4 調査担当者 玉城安明
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 中世(一五世紀～一六世紀)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡はマンション予定地となっており、調査はその一部約三〇㎡を対象に行なった。

土層の堆積は、地山を含め概ね三層に分けられる。第一層は現表土をなしていたと思われる茶褐色の土砂で、レンガや戦前の遺物が出土する明治・大正以降の埋め立てによる造成土である。第二層が遺物包含層となっている。層厚は約〇・八m。粘性を帯びた暗褐色の混砂土である。同層の露出面の層準は現地表下約四m。ほぼ海拔高である。第三層は灰色のシルト岩層で地山となっている。

遺構は確認されなかったが、出土した遺物には、中国産陶磁器や日本本土産と目される陶器、沖縄産灰色瓦、ヤコウガイ有孔製品、木製品、植物遺存体などがあり、バラエティーに富む。このうち木製品には木簡をはじめとして、漆塗りの椀・盆、下駄、桶、さじ、そのほか製材木などがある。これらの遺物は陶磁器の年代からみて、一五～一六世紀(タスク時代後半)頃に比定される。

土層の堆積状況や植物遺存体の折り重なるかのような出土状況は、本来この地が陸地ではなく水辺であったことを示しており、これらの遺物は水中もしくは干潟に遺棄されたものが、沈殿・堆積したものと考えられる。遺跡の位置については、明治初年頃の地図などから推定すると、唐船小堀かその付近の水辺の可能性が強い。

### 8 木簡の釈文・内容

木簡は二点確認されている。他に数点木簡とおぼしきものがある

が、肉眼でみる限り墨書はない。(1)は第二層最下部、(2)は残土(第二層相当)からの出土である。

(1) 「>きひ」  
[二カ]

127×32×2 033

(2) ・「。いわし五」  
[文カ]

・「。〇〇」  
〇〇

(91)×22×4 019

(1)は左側下位を欠損する。(2)は下端がさくれており、半欠品の可能性もある。文字は(1)に比べやや小振りだが、墨そのものは鮮明である。「きひ」「いわし」は物品名と考えられ、以下数量に関わる文言が続くものとみられる。特に(2)には裏面にも墨書があり、出荷元ないし先を記載したものかもしれない。今のところ当該期の琉球に関わる文献史料のなかに該当する品目は見当たらないが、かな書きである点から考えて、日本国内から持ち込まれた物資に伴う荷札であろう。ちなみに今回出土した木簡は、本県における初の発掘出土資料である。

木簡の釈文については十分な検討を経ておらず、今回は紹介のみにとどめおくこととし、記載内容の分析を含め後日報告したい。

(玉城安明)



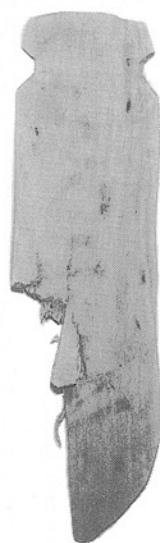
(2)表



(1)



(2)表



(1)

